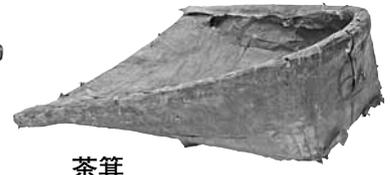




茶摘鋏 (金網籠付き)



冷まし籠



茶箕



茶摘鋏 (袋付き)



茶摘籠



フカシ



トオシ



タテ



生葉蒸器



オオツバ



茶壺

寄贈資料の中から

茶生産用具

今回は、資料の中から茶生産用具を紹介します。

茶の栽培は、沼津では愛鷹山南麓の原・浮島地区が盛んです。幕末から明治にかけて開拓が行われ、戦後に優良品種を導入してからは茶園が拡大されました。

茶摘鋏は、手摘みより早く収穫できるように考案されたもので、金網籠付きのものは大正末に普及しました。戦後には、長い布袋が付いた鋏が登場しました。袋といっても底があいていて筒状になっており、たまった茶葉を下から取り出せるようになっています。

茶摘籠は、手で摘み取ったり、茶摘鋏で刈り取ったりした茶葉を集める籠です。

タテは、蔓で編まれた縦長の籠で、畑から茶葉を運搬する時に使われます。

摘み取った茶葉はそのままで発酵してしまうため、蒸して発酵を止めなければなりません。

生葉蒸器は茶葉をふかすのに用います。この上へ生の茶葉を入れたフカシを2つのせて蒸します。

冷まし籠は、ふかした茶葉を広げて冷ますためのものです。

ふかして冷ました茶葉は、焙炉ほいろと呼ばれる、下部に炉がついた手揉み台で揉みながら乾燥させます。この段階でできた茶を荒茶あらちゃといいます。

茶箕ちやみは、竹製の箕に紙を貼ったもので、製品にした茶を冷ましたり、熱い状態の茶葉を焙炉から取り出したりするときに使われます。

トオシは、竹製のふるいで、荒茶を再製(再加工)する際に用いるものです。荒茶を箕でふるって選別し、粉や目方の軽い茶を除き、次にこのトオシで小型の茶葉をふるい落とします。その後、茶葉を切断してもう一度焙炉に入れて乾燥させます。

オオツバは、茶を壺に移す時に漏斗として使います。写真の資料は明治末から昭和初めに使用されたもので、直径71cmあり、特に、五貫目(18.75kg)や十貫目入りの大茶壺に製茶を移す時などに重宝したそうです。

茶壺は、仕上がった茶を保存するものです。茶は湿気が大敵なので、収納する際には壺を十分に乾かす必要があります。茶を入れたあと和紙で包んだ木蓋をし、洪紙をかぶせて紐で締め封をします。

資料館の調査ノートから⑱

西浦江梨での海苔採取と加工 その1

西浦江梨 杉山栄一さんの話と撮影写真

今回と次回の2回は、海岸に自生する海苔を採取し加工して板海苔を作るまでの過程について、杉山栄一さん（昭和9年生まれ）から聞き取りを行った内容をご紹介します。

杉山さんがお住まいの西浦江梨では、現在まで海苔の採取と加工が続けられています。写真を趣味とする杉山さんは、昭和50年代からその様子を撮影してきました。（以下、掲載写真はすべて杉山さん撮影）。

1. 海苔の種類と採る時期

西浦江梨の海岸では、岩海苔・ナノリ・ハンバの3種類が採れるが、養殖の海苔とは味も香りも違う。

岩海苔は短く、ナノリは長く筋状で、ハンバはワカメを小さくしたような形状である。一番おいしいのが岩海苔で、採れる量は岩海苔が最も多く、岩海苔と比べてハンバは半数ぐらいで、ナノリは少ない。

さらに、岩海苔には、黒色のクロノリと青（濃緑）色のアオノリがある。アオノリはクロノリよりも質が落ち、採れる量も岩海苔全体の中で2割以下と少ない。

海苔を採り始める時期は、海苔のつき具合と干潮との関係で、1月の中旬だったり、中旬だったりする。初めは岩海苔を主体に採り、2月頃からナノリ・ハンバを同時に採り、3月まで続ける。暖かくなると、海苔の色が悪くなり香りも落ちるので、採らなくなる。天然なので、天候によって海苔のつき方が異なり、たくさん採れる年もあれば採れない年もある。

2. 海苔の採り方と道具

写真の昭和53年当時は、西浦江梨の60軒の家から女衆1人ずつが海苔採りに出ている。大瀬崎では4か所、それ以外の西浦江梨では来海など4～5か所の地区に分けられ、それぞれの地区の海苔を5～6人で採った。地区ごとの人数は、1年交代で回ってくる当番が、そのときの海苔のつき方を見て増減させた。

採る時間帯は、干潮との関係があるので、朝9時頃からの3～4時間となる。昔は2日かかることもあっ



西浦江梨の来海での岩海苔採り 昭和53年1月

たが、だいたい1日で終わる。ひとつの地区の端からずっと磯を伝いながら、もう片方の端まで海苔をかいていくと、1～2時間が経過して潮が引くため、先ほどまで海の中にあった岩が時間差で出ている。今度はその岩の海苔をかくことができるので、来た道に戻りながら、また地区の端まで海苔をかいていく。

海苔をかく道具は、カイ（鉄製でカイジャクシ状のもの）と、ササラ（針金を束ねたもの）との2種類があり、それぞれを使い分ける。ポコポコしている岩は、ササラでシャッシャッシャッとかかかないと採れないが、スバスバした岩は、カイでシャッとかいた方がよい。

かいた海苔は、小ザル（小さなザル）へ入れて、コシビクの中の布の袋に入れる。布の袋は数枚用意しておき、1枚の袋がいっぱいになると次の袋に取り替える。昭和53年当時は、採り終わると、海苔を入れた布の袋を大きなショイカゴに入れ、磯から県道までショイカゴを背負って運び上げ、さらに大秤のある場所まで車で運んだ。

現在は、海苔を採る人数が10人ぐらいまで減ったため、主に一番採れる大瀬崎で採るようになり、すぐ近くまで車で行くことができるので、車で海苔を運んでいる。採り方や道具は以前と変わらないが、服装は変わった。昭和53年当時は、ポッコ（古着）を着て、すべらないようにワラゾウリをはいていたが、現在は、濡れないようにドライスーツを着ている。

3. 当番による採取日の決定と連絡

旧暦の1日と15日が干潮の関係で海苔採りに良いため、当番が潮の状態を見てナギでよさそうであれば、前日の夜、「旧農協の前に集まってください。」というような放送を入れて、海苔採りの女衆が集まる。

「明日、ナギならば採りましょう。」ということになるが、例えば集落に不幸があった場合や、婦人会の総会があるといった場合には、「では、1日延ばしましょう。」となる。このように、当番は全員が出るのでできる日程を調整するが、干潮の関係があるので、1～2日以内で調整しなければならない。

当日、波や風が出たときには、危険なので延期する。このときには、当日の朝、当番が「今日は波が高いので中止します。明日はナギ次第で海苔磯を行います。」というような放送をする。ときには、風が1週間も続いて海苔採りができず、次の潮時まで待たなければならないこともあった。

このように当番の判断は重要であり、当番が判断できない場合は、海の天気詳しい漁師たちに聞くこともある。

また、海苔採りは、みかんの出荷の時期と重なるので、みかんの出荷が多い家は、行けないこともあった。

（次号に続く）

駿河湾の漁

芹沢松雄さんの漁話

カジキのツキンボ（突き棒漁）1

〈ツキンボ漁師の家〉

物心ついたころから、うちでは家族でチャカ（発動機付小型漁船）に乗ってカジキのツキンボをしていた。ツキンボは春から夏の昼間の仕事で、冬には太刀魚やゴソ、イカを釣った。我入道のチャカの衆でも、底ものが好きな人とヒキナワ（曳縄釣り漁）が好きな人、大物が好きな人などがあり、俺のおじいさんは、ツキンボとかそういう大きいものを捕る漁が好きだった。

〈カジキの漁場〉

カジキの漁場は大瀬から土肥までの間で、我入道から出かけて行った。戦後の頃には大瀬より手前の、マセからサンゲイシの間で見つけることもあった。

〈ツキンボの道具〉

カジキを捕るには、2尋半（約3.6m）ほどもあるカシの柄の銚竿に、オチョコと呼ぶ銚先を3本つけて、チャカの先端のヤリダシ（突き台）の上から突いた。オチョコには300尋（約450m）のナワ（矢縄）をつけておき、突いたカジキをたぐり寄せた。また、すぐに次のカジキがあらわれると、ナワにブイダマ（ガラスの浮き）をつけて海に放ったりした。このナワを入れる樽をタルコミと言い、カジキを突くとタルコミからナワがどんどん引き出された。タルコミ自体も水に浮いた。漁には銚竿を2本から3本、タルコミを2つから3つ持って行った。

〈カジキの特性〉

いろいろなカジキがいるが、普通のカジキと言うとマカジキのことだ。マカジキは真っ直ぐに泳いで、尻尾から頭までどこへ当たっても身が固い。「後ろから行ってどこでもいいから当てろ。」と、小さい頃から言われていた。ムラ（群）カジキといって5匹や6匹で泳ぐこともあり、そういうときは一番後ろの魚（カジキ）を狙った。何故かという、頭から狙うと後ろの魚が逃げて行ってしまう。だから一番後ろを狙うと、残りの魚はこのまま泳いで行ってくれる。そうすると、まだ泳いでいる魚も捕りたいから、突いたカジキはタルコミを海に投げ込んで泳がせておき、次のカジキを狙った。

メカジキは、マルカジキとかメカと呼んだ。この魚は回りをつけて（円を描くように）泳いでいる。だから自分の前へ来るように、銚を持つ人が計算して船の梶持ちに指示をし、真向かって泳いでくるのを突くようにした。メカジキは頭から背中が固く、胴が柔らかい。頭と首の間あたりに急所があって、当たると10分か15分で死ぬ。でも他へ当てると、船へあげる前に、柔らかい肉がもげて逃がしてしまった。また、背中にタチベリといってヘリがあり、そこに当たったら魚が

全然痛くも痒くもない。20時間だろうが30時間だろうがナワをつけたまま泳いで行ってしまふ。俺も2回やったことがある。戸田で突いて、御前崎のほうで上げた。突きどころによってそういう可能性は充分あった。

クロカジキは我入道ではマダラとも言う、単独で泳ぐ魚だ。突くと下へどんどん潜って行くので、タルコミ2つ分のナワがいる。「クロカジキは底の水を飲まなきゃ死なない。」と、俺はおじいさんから聞いている。そんな例えがあるから、海底の深さのところまで、600尋でも700尋でもナワが行った。タルコミ1つが300尋なので、2つはゆうに使った。それだから、「タルコミは2つでも3つでも持って歩け。」とも言われた。

〈カジキを探す〉

チャカでカジキ漁をするには、最低2人で行った。エンジンはかけっぱなしで、年寄りの方が後ろで梶を取って漁場を探し、若い方が前でヤリダシの上に立った。揺れて走る船の上で、少しでも高い位置から探そうと、2人とも立ってカジキを探した。梶持ちはトモ（船の後ろ）に立って、カヅカ（梶柄）を股に挟んで操縦した。また銚持ちは、ヤリダシに立って足をふんばり、足元から引いた紐につかまった。

マカジキの場合は尻尾のヘリだけを水面上に出して来る。メカジキはタチベリと尻尾のヘリとを2つ出して来る。だからまず、1つ出ているか2つ出ているかで、マカジキかメカジキかを見分けた。年寄りは近くを探して、少ししか背びれが出ていなくても見つけられたが、若い衆はつい遠くばかりを見るので、なかなか目に入らなかった。カジキを見つけると、2人のうちのどちらか慣れてる方が銚を持ち、梶持ちはエンジンのそばへ下りて梶を取った。

〈メカジキを追うとき〉

メカジキを見つけると、どう船を動かすかは銚持ちが考えた。銚を構えて狙いをつけ、回って来る魚の動きを読んで先回りし、魚の動きにあわせて銚先を左右に動かした。梶持ちは、銚の動きに合わせて操縦するもので、「梶持ちは銚のウラッポ（先端）を見てろ。」と言われたものだ。何回でも銚先を、あっちへやったりこっちへやったりし、そのたびに梶持ちは梶を切った。でも、慣れない人が梶を持つと、魚を見て梶を取ってしまった。銚持ちがこっちへ行けと言っても、魚を見て魚の方へ行ってしまう、それでよく、梶持ちと銚持ちとがケンカをした。だから、梶を持つ人と銚を持つ人とが一致しないと、メカジキはうまく突けなかった。

〈マカジキを追うとき〉

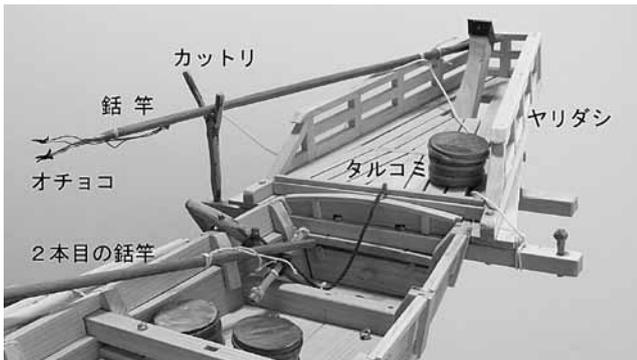
マカジキを見つけると、真っ直ぐに泳ぐのを後ろから追いかけるのだが、チャカの場合には、エンジンが小さく追いつけない場合があった。そういうときには、「キャーエサ」と言って、魚の泳いでいる尻尾の辺り

へエサを投げてやった。すると、音に反応するのか、カジキが回って方向を変え、真向かって泳いで来た。だからキャーエサを投げたときは、銚を下に向け、目を皿にして、回って来るカジキを探して銚を投げた。

キャーエサに投げるエサは、だいたいサバや何かを、2つや3つは持っていた。ツキンボの時期になるとウズワ（ソーダガツオ）とかが釣れるから、後ろへと1本か2本、短いコバネ（釣竿）でひっぱっていた。エサは何の魚でもよくて、生餌でなくてもよかった。

もう投げるものがない場合には、俺はカットリ（船べりに挿して道具を掛けるのに使う又木）を投げたことがある。それでも、カジキというのは後ろへポツタンと飛沫の音がすると、グルッと回る習性がある。だから「追いつけない場合は、何でもいいから投げてやれ。」と言われた。

エサをわざわざ家から持って行くということはなかったが、いよいよ無いときのために、タクワンだけは持って行った。それで、カジキに向かって長いタクワンを投げた。家からエサを持って行くとすると、タクワン1本だけだった。



チャカヤリダシ（船模型製作：鈴木真司氏）

カジキのツキンボは、前方に張り出したヤリダシを設けた船で行った。揺れる船の上、銚持ちはヤリダシに立って銚竿を構えた。

資料館からのお知らせ

社会科見学の様子



〈カジキを見たら銚を立てる〉

カジキを見たときに、うんと遠い場合は必ず、ヤリダシの上に立ち、銚をオッ立てて持ったまま追いかけた。銚というのは、遠くからでも見えるから、傍から見て、ああ、あの船は見たなとわかった。

また、投げて当たらなかった場合にも、銚を立てた。カジキは別だがメカジキの場合は、逃がして見えなくなっても、もう一度どこか近くへ浮いた。よしんば他の船が来ても、この船が銚を立てているイト（うち）は、ネキ（近く）に浮いた魚には、この船に権利があるということだった。もし違う魚だったとしても、この船が銚を転ばさないイトは、その近くに浮いた魚はこの船に権利があった。だいたい、銚は持っても10分から20分、長いときは30分も持つ人もいるが、もう諦めると銚を転ばした。

「銚を立てていると、その船の近くの魚はその船に権利がある。遠くの場合は別だけど、近くの場合は他の船は手出しができない。」そう決めることで、トラブルを防いでいた。

イルカがポーンと跳ぶみたいに、水面から上に魚が身を見せることがある。それでカジキが跳んだのがわかった。そういうときは、いっせいに跳んだところへ船が来るけれど、そのときはまだ誰にも権利は無い。いくら船が近くにいっても、魚を見ないと銚を立てるわけにかなかった。みんなが追っかけてこして、見た船が先に銚を立てた。初めに浮いていた魚なら別だけど、跳んだ魚だから、先に見た人に権利があった。「跳んだのは見た内に入らない。」と言った。

ツキンボをし、エンジンが黒いケブ（煙）を出して帰ると、「あ、あの船は魚を見たよ。」と言われた。「捕ったよ。」じゃなくて、「見たよ。」と言った。

（話：芹沢松雄氏 沼津市我入道在住）

5月18日、市立第三中学校の一年生の皆さんが社会科見学に来館されました。館内の見学の後、舞きりによる火起こしを体験しました。苦勞の末、ほとんどのグループが火起こしに成功しました。

火起こし体験は、本年の体験学習として実施を計画しています。

沼津市歴史民俗資料館だより

2012.6.25 発行 Vol.37 No.1（通巻194号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/rekimin/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp